

# 『おおいしだめとんとむがすあつたけど』②

大石田町で語り継がれてきた昔話をシリーズで紹介します

## 鹿毛馬



最上川べりの船橋神社の御本尊は馬の骨だといわれています。昔、最上川が現在の船橋神社のすぐそばを流れており、そこが渡舟場だったことから、「船橋神社」の名があるのだといえます。

江戸時代の頃、葉山の沼の主が、山の内の俊馬にみごもり、鹿毛馬が生まれました。それを横山の八鍛弁助という人が買い取って大切に育てていたそうです。ある日のこと、新庄の殿様が参勤交代で江戸に上る途中、その鹿毛馬が柵を飛び越えたり走ったりして遊んでいるのを見て、これはすばらしい馬だ、ぜひ私に売ってくれと申し出ました。

弁助は我が子のように大切に育てておった馬だが、殿様のたつての願いとあってはどうすることも出来ず、弁助はやむをえず売ることになりました。殿様はこの馬を江戸に連れて行きました。江戸に着くや、殿は自分の身体を洗うまえに馬の身体を水で洗い、美しい毛なみと、勇壮な姿、たて髪はこの馬をおいて、他にはおるまいと自慢しておりました。誰が見ても立派な馬なので、たちまち話はひろまり、参勤交代で江戸に来ている殿様方の注目の的となっていました。

まもなくして、江戸に時ならぬ火事が起こり、江戸八百八町は火の海と化し、逃げ場を失ってさまよう町人どもを見た馬は、火の中に飛び出して、橋や川を渡って多くの人々を助け出しました。驚いた町人たちは、まさにあの馬は、神馬でなからうかとただ茫然と見とれておりました。しかし鹿毛馬は力つきたのか、この火事場でとうとう死んでしまいました。

殿様はひどく心を痛めて、この馬の生まれ故郷に骨を持ち帰り、船橋神社に奉ったのです。いまでもこの馬のたたりのなにか、八鍛姓の家では鹿毛馬は育たないといえます。

○出典 滝口 国也／編著 『北村山地方の民話（昔話編二）』 【町立図書館蔵書】



今回のお話に出てくる火事は、明暦三年（1657）旧暦一月一八日（新暦三月二日）に起きた江戸時代最大の大火事です。「明暦の大火」またの名を「振袖火事」とも言い、焼死者十萬二千余人の未曾有の大火となりました。横山の鹿毛馬が新庄藩主を乗せて、猛火の中を江戸城本丸まで運んだことは記録として残っており、実在した馬のお話です。

江戸時代の馬は、交通や農耕、神事などといった人々の暮らしと深く結びついた存在でした。馬が人々に大事に育てられ、重視されていただけでなく、神馬としての神聖な意味合いをもった動物だったことがうかがえるお話です。

## 町の人口 平成31年3月1日現在

世帯数	2,348戸	(±0)
総人口	7,099人	(-12)
男	3,484人	(-6)
女	3,615人	(-6)
(2月中の異動)		
出生	4人	転入 4人
死亡	12人	転出 8人

※この人数は外国人も含めたものです。

## 楽がき帳

以前からやろうと思いつつ、しないままだった非常時持出し品の準備をすることにしました。町の防災マップにあるリストを見ながら、自宅にあるものにチェックを入れて、ホームセンターで一式揃った防災セットが売っていることに軽くショックを受けつつ、足りないものを買いました。いざ使っていないリュックに詰めてみたところ、全然入り切りません。仕方なく、本当に必要なものを検討して中身を整理しつつ、衣類は別の手提げ袋に用意することにして、何とか詰め込みました。とりあえずひと安心ですが、それでもパンパンなので、いざ使うときには、中の物をいったん全部出すことになりそうです。(あ)